

常なる磐

つねなる いわ season II

令和 4年 2月 4日(金)

その1

◇ 『蜂に刺されても、動揺するな』

将棋日本シリーズ



『蜂に刺されても、動揺するな』。

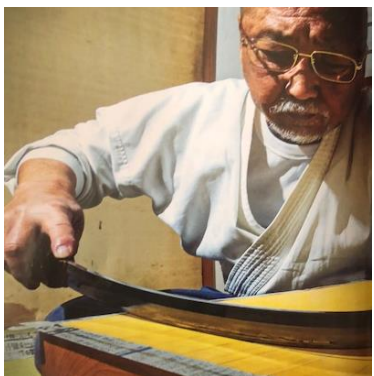
厳しい言葉だが、感覚的には理解できる。

藤井聡太 竜王 の写真を並列すると、師匠の杉本昌隆 八段 が竜王に伝えた言葉のように見えるが、そうではない。

関係するのは将棋盤。さらに言うなら、「升目」である。

藤井竜王の3連勝で第3局を終えた「王将戦」のように、8大タイトル戦をはじめとする大きな大会で使用される将棋盤は特別である。樹齢数百年の榿かやの木を材料に、盤面に真っ直ぐな木目(柁目)があらわれる最もいい部分を使用する。

さらに、盤面にひかれた9×9の升目は「目盛り」と呼ばれ、寸分の狂いなく漆うるしを盛る形で引かれている。これにより、線の美、空白の美、幾何学の美が生まれる。



作業は、日本刀に漆を付けて行う「太刀盛り」だ。

なるほどである。

細筆で線を引くのであれば、漆が盤面に乗っているだけ。日本刀で行えば、その鋭い刃やいばで盤面にわずかにへこみがでる。そのへこみの上に漆。漆が溝に座り込む格好だ。

これなら、漆もはがれにくい。そして何より、日本刀を線引き道具として使うことで、長い直線ゆがを歪みなく真っ直ぐに、しかも細く、均等(均一)に盤面に記すことができる。日本人の知恵であり、受け継がれた伝統の技だ。

写真は現代の名工：吉田碁盤店三代目、吉田寅義 氏。受け継がれるその技は、北斗神拳ではないが、二代目の父から受け継いだ【一子相伝の「吉田太刀盛り」】。

冒頭の『蜂に刺されても、動揺するな』は、師匠である父の教えなのである。

大切なことは、技術の伝承だけでなく、そこに関わる人の心構え・心持ち・心の置き方といった心の部分も併せて受け継がれていることにある。

むしろ無形の心の方に重きが置かれていると言ってもよい。

少し前ならまだしも、これだけ技術が発達した現代だ。盤面の線引きも、オートメーション化した機械に担わせれば、同等もしくはそれ以上の線が引けるだろう。大量生産で、安く、同規格のものができるはずだ。

さらに、蜂は無機質な機械を刺すこともないし、仮に勢いよく刺したとしても、影響を受けるのは蜂の方だ。

それでも、太刀盛りの将棋盤が好まれるのは、将棋というプロ棋士の真剣勝負の舞台を、まさに太刀を操った真剣勝負の匠が整えていることにある。

そういえば思い出した。

将棋の駒で有名なのは山形県の天童市。ここで作られる駒は「手彫り」。職人が彫った文字の上に、これまた専門の職人が丁寧に漆を塗る。何度も何度も繰り返し塗る。だから文字は浮き上がる。方法は違えど、工程は同じだ。

ここでも、真剣勝負の匠のお膳立てがある。

吉田碁盤店には、「太刀盛りは1日に2回まで」という不文律があるそうだ。「いい仕事を続けるためには、無理や色気は禁物」との教えであるが、それを象徴するような心向きを吉田寅義氏は【Number】のインタビューで語っている。

『私は、「不動心」という言葉を大切にしていますが、それは、太刀盛りには「平常心」で向き合わなければならないからです。もちろん、簡単なことではありません。

タイトル戦に提供する盤では、功名心^{はや}を逸ったり、「俺が漆を操ってみせる」と生意気なことを思ったりすると必ず失敗する。（※逸る:急ぐ気持ちが先だって、落ち着きがなくなる。焦る。）

【蜂に刺されても動揺するな】と語った師匠の境地に達するのは至難ですが、私はゆったりとおおらかな気持ちで仕事に向き合うことを心がけています。それができると、のんびりとしたいい線になるのです。』
【Number】1044号 p.28,29

AI将棋は人将棋を超えたかもしれない。それでも、棋士のように人が舞台を整えたことや、「太刀盛り」を真剣勝負で挑んだ匠の心意気を感じ取ることはできない。そして、藤井竜王^{しよさ}の所作から伝わる奢り^{おご}のない謙虚さ。それはあたかもAIに対し、『私はゆったりとおおらかな気持ちで盤面に向き合うことを心がけています。それができると、のんびりとしたいい将棋になるのです。』とでも語っているようである。